

けものフレンズみたいなもの

サンハテナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

練習中ですがとりあえずあげてみたいと思います

アニメのけもフレを自分の文で書いてみたいと思って書いてみました

個人的な意図としてはアニメでの演出？の私なりの解釈を示すことを目的してますが、

まあなぞってるだけです

ですが結構表現を考えるのが正直難しいです

ぜんぜん文章を書く根性も知識もないのでこんなもんですがよろしく

目次

出会いの風を感じて	1
サバナナの迷い子	5
ガイドのサーバルさん	9
目玉の生き物	14
暑いサバナナのひと時	17
木登りの授業	19

出会いの風を感じて

広い広い草原。

乾期の草原サバンナ。風の流れが、木々と枯れ草の群れを抜け、溪谷を抜け、その奥の広い平原にある太い幹のアカシアの木たちにかか

る。その木の幹の一つに何かがいる。おつきな耳はピクピクと風を感じている。

しましまのしっぽをゆったりと揺らす。

この生き物はチーターか？ヒョウか？なんだろうか。

そこには、一匹の猫耳少女が木の上で肘を枕にして寝息を立てている。

スースーと寝息を立てて欠伸しても起きることなく眠っていた。

僕はなんなのか？

ここに現れて僕はまだここがどんな場所かさえ、わかっていない。

僕は向こうに見える木の上の人の、後ろの草むらで、ふらふらと歩き青緑の羽根の刺した帽子を揺らしていた。

若干、長い草の生えたサバンナが歩く者の姿を隠し、帽子だけが揺れている、足取りは重そうだが、顔は見えず息遣いだけが聞こえてくる。

「んっはあ．．はあ．．。」

気温は熱帯地域だけあって熱い。草の中を歩くこの息遣い。目的地はあの少女の木だろう。

草は帽子によってかき分けられて、その草の動きと関係なく大地から湧き出る不思議な輝き、それはプリズムのような七色の光を放つもの。

それが歩く者にとって何を意味するかはわからなかったが、とにかく帽子をかぶった者は、着実にただひたすらに歩いていった。

そんな中、僕は気がついた。

木の上に大きな耳のようなものが見えた気がする。

僕は気になって木の上をおそるおそる草陰から覗いた。

あつ、あれは猫人間だ。

そこには大きな猫の耳と猫にしては短めの尻尾が着いてる人がいた。

僕はこの存在の意味は理解できなかったが、尻尾の先が小さく動く。

僕はそれをみて、すこしだけ嬉しい気持ちになった。

僕は寝ている猫人間を起こさないように慎重に歩く。

僕は草陰に隠れながら歩いていく。

しかし相手は耳がいいのか、遠くから耳がびくびくしているの見える。

足音を殺して歩く。つま先立ちで足をつけてそのまま歩く。

これなら気づかれないうらう…

しかしムクツと起き上がり、近くに飛んできた猫耳少女。

「うわーなんで！」

僕は猫人間に追いかけていた。僕は逃げる。

「あははあーはー、うわーい狩りごっこだねウヒイ！」

草を掻き分け、必死に走る僕。

近くにあった低い木を回ってなんとか逃げようとするのに何かはまだ私を追いかけてくる。

じぐぎくに逃げまわる者。飛び跳ねるように追いかける者。

なんとか振り切って

「……はあ……」

なんとか丈の長い草に隠れて、猫人間の視界から消えたみたいだ。

ボクは息を潜めて猫人間が去るのを待つ。

「……」

「あれーきえちやった…どこに行ったのかな。」

猫人間は周りをキョロキョロとしながら僕を探している。

僕はふるふる震えている。

なんで追われているだろうか：

追われる者は必死に息を殺して、事が過ぎるを待った。

僕は下を向いていた。ふと蟻が葉っぱを運んでいるのが見えたらだ。

ほんの30センチを働き蟻が通る。働き蟻はどこかに葉っぱを持っていくのだろう。現実逃避した僕は蟻を追いかけていた。

蟻は葉っぱを巣にいるたぐさんの蟻と合流して葉っぱを運び入れていた。

蟻の巣の2mほど奥の方に見える葉っぱに何かを見つけた。あれはなんだろう。バツタがしがみついてついて葉っぱを食べていた。

(なんだバツタか・・・。)

バツタの目に僕の顔が写って見える。

バツタとの距離は鼻先から2mほどだったが、しかししばらく草を食べていたバツタは突然跳び上がり羽を広げてこちらにやってくる。なぜ飛ぶのか。理由はすぐにわかった。突如現れたネズミに追いかけていたのだ。しばらくは逃げていたが、このバツタは食べられってしまった。バツタを啜えたネズミがこちらをみる。

「...」

僕も同じように食べられてしまうのだろうか。

僕は何故ここにいるのか全然わからない。

少なくともこんな所で食べられて終わりなのは嫌だ。

逃げる者は息を潜めていたが、

しばらくすると同じ体勢で疲れてくる。

「がさっ。」

体勢を変える音。

一瞬音がすると、僕はその時、猫人間の耳がピクツと動いたのが見えた。顔がこちらを向く。

僕は驚いて立ち上がろうとする、けれど

「そこだ——！」

膝を曲げてそのバネで跳んでると思ったなら、何かわからない凄まじ

い力ですさまじい跳躍。数メートルの高さまで跳んでいる。

「うわああああー！」

どてっ

すでに目の前には猫耳少女。

間に合わず僕は倒れて、もう駄目だ。

「ハアハアハア」

猫人間は口を開けて食べるタイミングをうかがうようにみてる。

「……!!」

すごい見つめてくる、馬乗りで、すごく近くて、牙もあつて、こわい。

「食べないでください!!」

僕はただ必死だった。

「食べないよ！」

つづく

サバンナの迷い子

平原は枯れ草で茶色く、背景のように向こうには大きな山が見える。

その山は普通の山と違い、頂上に大きなビスマスの結晶のような七色の固体が見える。

結晶は大地のところどころにある煌きと雰囲気というか色が似ていた。

大地のそれは大地から小さく噴き出して雪の結晶のようにふんわりとっていて、ほとんどは何かに触れるわけでもなく、空気中で解けてなくなっていく。

そんなものが漂うサバンナに二人はいた。

一人はここにやって来た者、一人はここに住む者。出会い頭、追われる来訪者、娯楽的に追う者。

二人はギクシャクしながらもなんとかお互いを知ろうと努力を試みる。

僕がここにきてそんなに経ってない。

ここにはときより遠くで何かの鳴き声が聞こえる。

それはゾウか、キリンか、シマウマか、ハイエナか、とにかく動物の鳴き声が聞こえる。

僕はその声が聞こえるたび、怖さがやってきて辺りを見渡していたが、今は目の前の猫人間に声をかけられ、僕はビクツとして猫人間の言葉になんとか警戒しつつ、そちらを向いた。

「ごめんね…私、狩り…ここが大好きで…!!」

猫耳少女の耳は反省して折れこむ。

「あなたは狩り…ここがあまり好きじゃないんだね…。」

猫人間の尻尾が揺れる。

「…うつ…え。」

人間の目が振れる。

「えーと…その。」

お互いがお互いを気遣って微妙な空気。そして静寂。

「……。」

不安な静寂にあると思いきや、出されるあの光景、ネズミがバツタを咥えていた光景と、この猫人間の牙の鋭さが、人間の中で嫌な想像を掻き立てフラッシュバックさせる。

「…たっ…」

僕はいつまでも恐怖から逃げてるだけじゃダメだと思い。首を振り、恐怖を振り切って、しっかりと相手を見ようと相手の顔に目を向ける。

「…うっ？」

人間が顔を上げてみると猫人間の大きな耳が風に触れているのに気づく。その揺れは毛一本まで、細かく複雑に揺らして、綺麗に見える。

「ああすごい…。」

思わず感嘆を漏らす人間。

「あつちよつと元気になったかな？」

「いえ、あの…その…大丈夫です。」

人間は表情を読まれまいと、無意識に口をきつく結んだ。

しかしこのままではいけない。

「あの…。」

「なにになに？」

猫人間の顔が近い。

「あなたはここの人ですか？ここはどこなんでしょう。」

「えーと、ここはね、ジャパリパーク！この辺は私のナワバリなの！」

大地を示すように両手を広げる。

「あとえーと、私はサーバルキヤットのサーバルだよ。」

猫耳少女サーバルはそれを示すように猫独特の招くような、招き猫のようなポーズをする。

「サーバルさんですか…。」

僕は名前を確認すると質問を続けた。

「サーバル…さん、そのお耳と尻尾はなんででしょう？」

「…お耳？尻尾？それがどうしたの？」

「いや初めて見たので…。」

「そんなに珍しい？あなたこそ尻尾と耳のないフレンズは珍しいね。」

「フレンズ…？」

「どこからきたの？ナワバリは？」

「わかりません。覚えてないです。気づいたらここにいて。」

「もしかして昨日のサンドスターで生まれた子かな…？」

「サンドスター？」

すると猫耳少女サーバルは何か確信したようにみえた。

「昨日あの山から吹きだしたんだよ。まだ周りもキラキラ、虹みたい
に七色に輝いてるでしょ？」

「あの七色のやつ、サンドスターっていうんですか？」

「そうだよつ。そして何のフレンズか調べるには…。」

「みゃー！鳥の子ならここに翼!!」

「え？」

僕の頭をもつて頭の後ろや横を確認するサーバルさん。

「あれ？ない？おかしいな…。」

「服にフードがあれば蛇の子!!」

「あれーない？ない？」

なんだかよくわからないけどサーバルさんが困ってる。僕に何か
できることはあるだろうか。

「あのー…。」

「あれ？これは？」

サーバルさんが何かに気づいたようだ。

「これ？」

「これとは僕の背負ってたかばん？だった。

「…かばんかな？」

「え？か…ば…ん…？かばん！かばん！」

「ヒントになりますか？」

「うーん…。」

悩むサーバルさん。

「わかんないや。」

「…。」

「これは図書館にいかないとわからないかも？」

「図書館…。」

図書館っていう場所に何かあるかも。

「わかんない時は図書館にいつて教えてもらうんだ！」

「図書館…そこで僕が何の動物か聞けば…。」

「…。」

「ありがとうございます。サーバルさん、図書館ってどっちの方にいけばいいですか？」

「途中まで案内するよ。」

「あ、すみません…よろしくお願いします。」

「あつ、でも何の動物かわかるまでなんて、呼べばいんだろう？うーん…。」

「名前ですか？」

「どんなのがいいかなあ…。やっぱりわかりやすいのがいいからあ…。」

名前を貰えるなんて嬉しいな。どんな名前になるのかな？

「じゃあねー…かばんちゃんでー！」

「どうお？」

「ありがとうございます。」

サーバルさんの名づけのセンスは気にしないでおこう。

次回へつづく

ガイドのサーバルさん

「かばんちゃんで!!」

サーバルさんは僕に名前をくれました。

僕は図書館まで無事にたどり着けるでしょうか？

ちよつとだけ怖いな。

私はサーバルキヤットのサーバル。

昨日のサンドスターで生まれた子を見つけただ。

名前はかばんちゃんっていうんだけど私がつけたんだよー。良い

でしょー？

かばんちゃんは迷子みたいだから案内することになったんだー。

かばんちゃんには悪いけどちよつと嬉しいな。

私も生まれた時は昔、案内されたっけ。これから何を教えてあげようかなー。

「がいで♪がいで♪サバンナがいでー♪」

先導するサーバル。

サーバルさんはスタスタと早歩きで僕を先導してくれる。

二人でいく道はいつもよりも安心する。

僕は余裕も出てきて周りの景色も眺める。

立っている大きな木を歩いて抜ける。野原の草が終わりがわからないほど続いている。

ずっと周りを見てみるとサーバルさんが声をかけてくれた。

「広くて見晴らしがいいでしょー!」

「はい。」

僕は頷くとサーバルさんはこの場所の名前を教えてくださいました。

「ここはサバンナちほーっていうんだよ。」

「へえー…。」

「ここってサーバルさん一人のナワバリなんですか?」

「まさかあ。他にもフレレンズはいるよ。」

「例えばねえーさつき通った所に大きな木があったでしょ?」

「え？あ、はい。」

「あそこは今は葉っぱがないけど、葉っぱが生えたらよくキリンちゃんがいるんだよ。」

「キリンさん？」

「そう、キリンさん。きりんさんのおうちも近くにあるんだよ。」

「そうなんですネ。」

「ほらあそこー！」

サーバルさんは草原の山側の方を指していたが、どこにも何も見えない。

「どこですか？」

「ほらー！向こうの木のところ！あそこらへんに、よく立っているんだけど…今日はいないね！」

「へー。」

「あ、今、あそこにシマウマちゃんがいるね。」

「え、どこですか？」

「ほらあそこー！」

サーバルさんは必死になって指をさすが視線を動かしても、見つからない。

「見つからないです。」

「ほらっあそこに、あついっちゃったー。あ、でもその横にトムソンガゼルちゃんがいるね。」

トムソンガゼルさんは尻尾を振りながらぴよんぴよん跳ねている。

「…跳ねてますね!!」

「トムソンガゼルちゃんも逃げるときによく跳ねてるんだー。元気だと教えて相手の戦意を無くさせるんだって。」

「へえーおもしろいですね。」

「そういえば、この近くにサーバルさんのおうちってあるんですか？」
「私のおうちはさつき寝てた木の向こうの草原にあるよ。あとこの近くにおうちじゃないけど私のひみつのばしょもあるよー！」

「へーそうなんですか。」

「行きたい？」

僕は質問について考えながら歩み、数秒後、答えた。

「えーとそうですね、ぜひいつてみたいです。」

「そうかーだったらゲートに行く途中にあるから行ってみようか？」

「はいっ！」

サーバルとかばんはそう約束をして歩み続けた。

「あ、もうすこしで川がみえるよ。川を越えたらもうすこしだからね。」

そういつたサーバルさんの先はごつごつした岩があつて先が見えない崖があつた。

「図書館はジャングルちほーの先だから、今日はサバナの出口まで案内するよ。」

スキップしながらぴよんぴよん跳ねて歩くサーバル。尻尾もぴよんぴよんしてる。

「出口って結構、遠いですか？」

「すぐ近くだよ。さあいこいこ。」

跳ねながら移動するサーバルさんは加減をしてくれてるみたいだけど、ぜんぜん速い。

僕は急いでついていく。

崖の先でサーバルが手を振っている。

「おーいー！」

「はあ…はあ…まっってくださいい。」

必死に追い付くかばん。

僕は崖の先に立ったサーバルの先の崖を覗き込んだ。

「わあ…あー…。」

こんな崖下りれるのかな？

サーバルはかばんの後ろで立ったまま足を開き、左右の足を交互に膝を曲げながら、崖の距離をしっかりと見ている。

サーバルさんは覗き込んでる僕を後目に何の気なしにジャンプして下りていく。

「はやくはやくー！」

軽々とやるサーバル。

サーバルさんは崖の中間あたりでまっつてくれている。

僕もなんとかやってみよう。

「ううっ…」

かばんの足は竦み、揺れている。

僕は左足を確実な岩にかける。右手と左足を支えにして、左手を下の方に移す。左手と両足を支えにして上に残った右手を体に近づける。慎重に左足を足場になりそうなところにかける。

「ゆつくりな動き。…かばんちゃんつて、もしかしてナマケモノのフレンズとかなのかな？」

「え？ナマケモノ？」

サーバルさんの声に気をとられた僕は、足が滑って砂ぼこりをたてながら滑り落ちる。

「うわああああ!!!」

全長6〜7mぐらいある崖、3分の2ぐらいのところから一番下の地面にずりながら、滑り落ちる。

すぐにサーバルさんは手を貸しに飛んできた。

「大丈夫…?」

「すみません…。」

かばんは自身の能力がなさを自覚した。

「やっやっやっ。」

川を超えるサーバル。

川の中に離れてある岩を足場にジャンプするサーバルさん。すこし離れたところにある岩もなんとなくジャンプ。

すごい軽やさ。

「こーやってジャンプするんだよ?」

サーバルさんは振り向いて待っててくれる。

「うっ…。」

「大丈夫?ジャンプしなくてもいいよ。」

「いえ、跳びます。」

僕はしっかりと前後左右を確認してから、川をみて意を決して跳ぶ。

「…うわっ！」

ボツチャーン

案の定、川に落ちる僕。

この川は水深はそんなにないため、溺れることはない。

手を貸してくれるサーバルさん。

「ごめんなさい…。」

「へーきへーきっ！フレンズによって得意なこと違うから。」

つづく

目玉の生き物

この川は谷になっている。

濡れた僕はサーバルさんに励まされても、しばらく心が動揺した。

けど川べりを歩いていると優しいせせらぎと風がすうつと僕の心を落ち着かせる。

「けがはない?」

かばんはサーバルに聞かれてひぎ、ひじなど、体の節々を確認してみたが特に異常はない。

「はい、大丈夫です。」

「そう、よかったよ。」

谷は崖がきつくて僕にはとても登るのが無理みたいだから、サーバルさんは川の谷を抜ける抉れた道のようなものを教えてくれるそうです。

「ここだよ。」

抉れた坂道を指を指して、先にいつて待っているサーバルさん。

僕がおいつくとサーバルさんは大手を振って嬉しそうに坂道を登っていきました。勾配がきつい坂だからだいたい辛い。

やっと坂が終わって平地にでると僕は変なものを目撃してしまいました。

「はあ…はあ…。」

平地になっても抉れた道はまだ谷の続きで茶色の崖に囲まれて大きな岩がごろごろしている。

岩は大きくて身を隠すのには十分だけど、今のところその必要はない。

「ん?」

今、サーバルさんは普通に歩いてスルーしたけど、青い何かが見えた気がする。

僕は好奇心で岩をすこし覗いてみる。そこには目玉が一つの生物

がいた。

「あの…何のフ、フレンズさんですか？」

僕はサーバルさんに倣ってなんとなく喋りかけてみるが、返事がない。

「あ、あのサーバルさーん、あのーこの何のフレンズさんですか。」

5〜6mほど離れたサーバルさんに声をかける。

振り向いたサーバルは叫んだ。

「うあつそれはダメーセルリアンだよ!!逃げて!!」

僕はその言葉を聞いてよくわからなかったが走り出す。

するとセルリアンが追いかけてくる。かばんも必死に逃げる。

「あつ。」

しかしかばんの体は突然バランスを崩して地面にたたきつけられる。

それは何故か、なんてことはない、かばんが足場の悪い地面につまづいたからだだった。

しかし食べられるものにとってその一瞬の隙は命取りとなる。

迫りくるセルリアン。

僕はとっさに目をつむったが、その時、声が聞こえた。

「みやみやみやみやみやー!」

サーバルさんの声。

その声の後に、打撃音とともに裂けて開くような、はじけるような音が響いた。

僕はそのサーバルさんの声をきいて、そちらに目を向けていました。

かばんはサーバルの手が光輝いて、セルリアンの蒼い氷のようなものを打撃する瞬間をみていた。

サーバルの光る拳は、蒼い体と蒼い氷にひびをいれる。

蒼い氷が砕けると、セルリアンの体はブロック状に分かれていき、四散して、蒼い四角いものがパーンと破裂音と共に辺りに散らばった。

それも数秒後にはだんだんと七色の雪のような結晶になっていた。

七色が散りゆく中で、かばんは驚いた顔でサーバルをみていた。

「……。」

僕は放心していた。

七色の雪の結晶もまた消えていく。

「あれはセルリアン！ちよつと危ないからきをつけて？でもあれくらいの大きさなら自慢の爪でやつつけちゃうよ。」

「すごいですね、サーバルさん。それに比べて、僕って相当ダメな動物だったんですね……。」

かばんは自分の動物としての弱さをまた痛感する。

「大丈夫だよ！私もドジだとか、ぜんぜん弱いとか言われるよ！」

「サーバルさん……。」

「それにかばんちゃんは、すごいがんばりやだから、必ずすぐに得意なことわかるよっ！」

サーバルは真に迫った笑顔でそう言った。

サーバルさんはまた僕に手を貸してくれた。

かばんは不安な顔をしていたが、サーバルがそういつてくれることで安心を貰いたちあがった。

暑いサバンのひと時

炎天下のサバンナはその日、最高の暑さになろうとしていた。

サーバルさんと僕はフレンズについて話しながら歩いていた。

「はあっ…はあっ…。あついねー」

かぼんの体からは汗が噴き出す。

「はい…あ、あの聞いていいですか？」

「なあに？」

「フレンズさんって、いろいろいるんですか？」

「いるよっ」

「私より強くて恐くて大きいネコ科の子もたつくさんいるよ。」

「噛んだりします？」

「そんなこと…たまーに機嫌悪い時だけだよっ」

「そ、そうなんだ…」

「あ、でもさっきのセルリアンには注意だよ！本当はこの辺にはあまりいないはずなんだけど…」

「セルリアン…」

蒼くて追いかけて来て怖かったけど、サーバルさんが居てくれたよかったです。居なかつたらと思うと…

「さっきのサーバルさんの爪すごかったです…」

「フレンズの技だよ」

「僕もなにかできたら良いですが…」

「大丈夫だよ、また出てきたら私に任せてね？」

「はい…すみません」

僕も何か特技があつたらサーバルさんのこと助けられるのになあ。

かぼんが話しながら歩いているうちにサーバルはサバンの一つの木陰の草むらにサーバルは寝転がった。

「はー、ここでちよつときゅーけー」

僕も止まって木に寄りかかって座り込んだ。

「はあっ、はあっ、あついよー。太陽が一番熱い時間は下手に動いちや

だめだからねー」

「はい…本当です…」

太陽は南の方にあつた。

サーバルはつま先と膝を草の地面に置き、四足の姿勢から、両手の肘を草につけて体の下方向に重心を置いて伸びをした。

「ふあ〜」

あくびが出るサーバル。

「あとで水も飲もうね！こっちもお勧めの場所があるんだ」

体の伸びをした後に、足の伸ばしながらこちらをみて、寝転んだ。

寝ころんだサーバルさんの息は荒くふーっふーっつっつという鼻の呼

吸の音とお腹が動くのが良くわかる。

「あーあ、鳥のフレンズならひよいつと飛んでいけるのになー」

サーバルは寝ころんだまま、空を泳ぐような仕草を見せる。

「……」

ん？あれ、サーバルさんがなんか僕を見つめて止まっている。どうしたんだろう。

「あれ、そういえば、かばんちゃん、もうはあはあしないんだね？元氣になってる？」

「え？あ、はい」

「すごいよ、結構歩いたのにー」

「そ、そうかなー」

「私、あなたのつよいとこだんだんわかってきたよ」

サーバルは嬉しそうな顔でかばんをみた。

これって僕をつよいとこなのかな？

僕たちはすこしだけ気温下がってからサーバルたちは先を急いだ。
つづく

木登りの授業

「あ、そうだ！キノボリができると、逃げたり隠れたりするとき便利だよ。」

サーバルさんは木登りの授業を始めた。

「ちよつとやってみない？」

このあたりの木はバオバブが多い。バオバブは茶色の枝が集まって太い幹をしている。

先端や所々には若干葉っぱが生えて、それが木であることを主張しているようだ。

サーバルはバオバブの木に手をかけてみやみやつと爪を掛けて登った。

「ね、簡単でしょ。」

「無理ですよー。」

実際サーバルさんは軽々と25m近くある木登ってくれましたが、こんなのはできるわけではない。

そこでサーバルは解して、小さいバオバブを紹介した。

僕は幹の付け根にかばんを置いて、手をかけて登って、サーバルさんがお尻を支えてくれたこともあって、バオバブの安定できる場所に到達した。

「いいでしょーキノボリ！」

「うわあ…。」

かばんの感嘆の声。

さっきの木よりは小さいけど、それでも向こうの丘までは見えるみたいだ。

「あそこの丘が目的の水飲み場だね。」

サーバルさんは指をさしてそういった。

バオバブの周りは枯れ草だが、丘は緑っぱい草で覆われて花も見える。

「やつ、(ハハハ)。」

サーバルはかばんが下りるのをまっつてから先に進んだ。僕はサーバルさんに迷惑にならないように、急ぎ足でついていった。

丘はそれなりの坂で、途中つまずいたけど、なんとか登り切った。サーバルはかばんがつまずいたのを見ていたが、助けも借りず、不満も出さず自分で歩きだしたのを見て、穏やかにこの子は一人でも大丈夫であろうと悟った。

登り切った先に水飲み場はあった。

「ふあー水だー。」

サーバルとかばんは口を揃えて言った。

コンコンと湧き出るオアシスはその周りが草木に覆われて、多くの者たちが集まる場所である。

二人はただ水に向かった。

水を飲む音だけが響く。

「おいしい！」

サーバルとかばんは二人は見あつてから笑う。

「結構歩いたね。」

「思い返すとそれなりわりと長い旅でした。」

「まだサバンナちほーだよ？ふふっ。」

二人の後ろにはサバンナが変わらず在り続けている。

「まだ出てないんでしたね。」

「そうだよー、元気出していこうね。」

「はい…。」

「あ、あそこ休憩した木陰だね。」

さつきいた場所が景色の一部になっていた。

「景色を見ながら水飲むと生き返るよね。うーん。」

サーバルさんは手を空に伸ばして伸びをする。しっぽが水平にピーンと伸びる。

「そうですね。でもサーバルさんわりと元気でしたよ。」

「そうだったね！」

しばらくして暑さでやれていたサーバルの思考がお水の力で戻ってきた。

「あれ…にしても、今日は空いてるなー。いつもは場所取りになるくらいなのに。もしかして怖い誰かでもきたのかな？」

水飲み場には二人だけである。

かぼんは気が付いた。水面がぼこぼこしていて何がいるように赤い影があることに。

「だあれ？」

その声の主は水の底から、水面の一点を破り、ドーンと大きな音が響いた。

「うわあ、たうべえ…。」

かぼんは思わず叫ぶ。

「あ、かぼ。」

サーバルが当たり前のように言うその者はカバのフレンズだった。つづく